

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	話し合うことによって考えを進める : 感情思考から論理思考へ
Auther(s)	下鳥, 照子
Citation	児童の言語生態研究 , 10 : 40 - 46
Issue Date	1980-05-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045116">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045116</a>
Right	
Relation	



## 子どもにとって話すということ

# 話し合うことによつて考えを進める

## 感情思考から論理思考へ

下鳥照子

### 1. 授業案

一、日時 昭和五十四年三月五日  
午後一時四十分～三時

二、児童 東京都町田市立南第四小学校五年二組  
男子十九名 女子二十一名 計四十名

三、領域 音声言語

四、授業テーマ 話し合うことによつて考えを進める。

五、授業テーマ設定の理由

ことばの性格から言語活動を大きくとらえると、音声言語活動と文字言語活動という二つの領域に分けることができる。子どもの日常言語活動では、なんといっても音声言語活動が大部分を占めている。小学校に入学するとすぐに子ども達は「文字の習得」という国語の学習課題を与えられ、卒業に到るまで「文章の読解」「文章による表現」といった、文字言語活動を教えられるが、音声言語活動に関

しては、単に言語事項といった場面で扱われるだけで、教えるなどというところまでは重視されていないのが現状である。しかし、文字言語活動の指導は、国語教育における重要な部分ではあるが、部分は部分にすぎないのだから、こちらにばかり重きを置くのは、片手落ちと言えるだろう。常に、音声言語活動の指導を忘れてはならない。日常の国語の授業では、音読によつて文章を音声化したり、お互いの感想を話し合うなどの、音声言語活動が行なわれているが、それらは、ほとんど「文章読解」のための「手段」として行なわれているだけで、音声言語活動が目的になっている授業はめったにない。子どもにとつて、「文字化」

「文章化」ができないということが、自由な言語活動における障害である以上、この障害を取りはらうために文字言語を習得させることは大切である。音声言語活動においては、「文字化」「文章化」という障害がない分だけ、自由な言語活動だと言えるが、子ども達は、やはりそれぞれの

発達段階で、それなりの障害を持っている。そこで今回は「対話」という音声言語活動において、五年生が持っている障害を見定めることによつて、その障害を乗り越えさせる指導を試みることにした。

五年生は実に話好きである。けんかも「口論」であることが多い。(これは三年生などでは考えられないこと)また、四年生に比べると、一つの話題で話す時間も長くなっている。自分の主張に理屈をつけ、一人で長々と話すこともある。ところが、長時間にわたる話し合いを持ちながらも、話し合うことによつて考えを進め結論に到るということができないので、結局、中途半ばなところで「多数決」に頼ることも多い。自分の思わくでしか考えようとしないかたたり、友達に対する好き嫌いにこだわったり、変なところで同情したり、意地を張ったり、感情を切り離すことができない段階にあるのが五年生だと言える。話し合うことによつて考えを進めるには、どうしても感情と論理とを区

別し、感情を切り捨てる必要がある。その上で、対話に参加している一人一人の考えをからみ合わせることによって、現時点での自分の考えを進めることができるのである。

今回は「人食いワニの問題」を子ども達に考えさせることにした。感情を切り捨て、論理的に考えを進めなければ答に到達できないこの問題を、子ども達は六人七人のグループで話し合い、なんとか答にたどり着こうと熱っぽく各自の考えを出し合っていた。ところが、各グループで二度ずつ話し合いを試みても、答にたどり着くことのできたグループは一つもなかった。子ども達は論理的に考えるためには障害になるようなことにばかりとらわれてしまい、考えを先に進めることができないといった状態で、とても答に到達するどころではなかった。そこで、まず、子ども達からこれらの障害を捨てさせることから始めることにした。子ども達に、話し合いの録音テープを聴かせ、自分達の考えが進む上で障害になったものを発見させ、考えを進めるためにはどうしても切り捨てなければならないものを切り捨てさせる。その上で、現時点より考えを進め、答えに到達するまで、考えをからみ合わせる、という活動をさせたいと思う。答えに到達するように話し合い、話し合うことによつて答に到達させたいと思う。

#### 六、指導計画

- (1) 「人食いワニの問題」をグループごとに話し合い、考えて答に到達する。
- (2) (1)の録音テープを聴き、考えが進まなかった原因を発見する。
- (3) 再度「人食いワニの問題」をグループごとに話し合い考えて答に到達する。
- (4) (3)の録音テープを再生し、考えが進まなかった原因を発見し切り捨てた上で考えを進め、答に到達する。

(本時)

七、本時授業形態 担任及び児童の言語生態研究会会員に

よる共同授業。

#### 八、本時の展開

(人食いワニの問題——本時使用の問題文)

ナイル川に知恵自慢の人食いワニが住んでいた。ある日そこを子どもを連れた母親が通りかかると、ワニは、母親から子どもをうばってしまった。

子どもをうばわれた母親は、ワニに子どもを返してくれと泣いてたのんだが、ワニは母親がいくら泣いても返してやらなかった。

けれどこの知恵自慢のワニは腹がいっぱいだったので、母親と知恵くらべをしてやろうと思って母親にこう言った。「おれが子どもを返そうと思っているか、返すまいと思っているか、そのどちらであるかを当てたら子どもを返してやる」

母親はいっしょうけんめい考えて□と答えた。すると、子どもは無事母親のところにもどった。

ワニは

「人間もそうばかにしたものじゃない。おまえはなかなか知恵のある母親だ」と言って笑った。

(本時使用の録音テープ)

O Kさんはなに?

K 返そうと思ってるなあ。

I 理屈は?

K 理屈うちゅう、えっとね、やっぱし、返そうと思ってるかいなかだから。

O どっちかだろ?

K どっちかだろ、ねえ、両方と思っているかもしれないけどどっちかでしょ、その返そうと思っているか、返さ、返そうと思つて、あつ、返さないと思つていたらやっぱり返さないじゃん、当てても。

T えっ、おれは。

K 当てても返さないじゃん。

B だからそういうことを言わないっていうんでしょ。

K だから、あの二つのどっちかだと思つたおれは。

T うん。

K 返そうと思つていないかって言ったらさあ、返そうと思つていないんだから、もし当てたとしても、やっぱし返してもらえないと思つたの。だからおれは返そうと思つていふと思う。

T えっ、おれはねえ、うんと、まずワニがつかまえたでしょ、そんな母が泣いても人食いワニっていうのはくっちゃうでしょ。どうせ。でも、あんまり母が泣くのでつていうんだから、どうせふざけたんだからさあ、あれじゃん、返そうと思つてゐるっていつて、そのワニがうらをかいて、その、返そうと思つていないって言うとおれは思うよ。

K だからどういう気持ち?

T だからおれは、返そうと思つていないっていう方だなあ。

B えつとぼくは、返そうと思つてゐるって思うんだけどそれはなぜかというとおれじゃん、返そうと思つていなかったら、そんな、どっちか思つてゐるなんてチャンス与えないと思うんだ。

K あんまし泣くのでじゃん。

B えつ。

K あんまし泣くので、だからああいう問題出したんだよ。

B えつ。

T そうそう。

K それで、おれはそのどっちかって言つてんだもん。だから、泣くのでつて言うんだから、あれじゃん、だつて泣いたつてふつう食べちゃうんじゃないの。

O そうだよなあ。

I やっぱし。

T でもさあ、あれじゃん、あれ、母親が泣くのでつてい





これは使わなきゃいけないっていうものだけ残して、これは余分なこと考えているなっていうところに×をつけて。

Tu 調度上に人の名前が書いてあるでしょ。だから、悪いけどね、I っていうのは頭悪いなこと、とかね。

C 笑い。

Tu あっ、でもこの I はなかなかいいこと言った、とかいう風に、鉛筆で印をつけていきなさい。どうしてこんな余計なこと考えるの、こんなこと考えるからだめなんだ、というところは、ザアッとして消しちゃうの。

〈話し合いの録音テープを聴く〉

T プリントの中で全然ない方がいいと思うもの。

C 一枚目の「どっちかでしょ」っていうところはいる。

〔答は「返えす」「返えさない」の二者択一である点が明らかになった。〕

C これは関係ないよなあ。

C 正直だとか正直じゃないっていうところはいい方がいい。

T 正直っていうのはあった方がいいか、ない方がいいか。よくわからないんだけど、知恵自慢っていうふうに出ているんだからいらなくないと思う。

C 返してもらったっていうのがあるんだから、別にいらなくないんじゃないかと思う。

〔母親は子どもを返してもらったという動かせない結果をきちんと押えることができた。〕

C では、正直っていうのは消します。

T えっ。

C 正直っていうのは進んでいったら消えるんじゃない、たぶん。

C でも知恵自慢っていつでもワニは正直っていうのはあるかもよ。

〔「たぶん」とか「かもよ」など、まだ、思いつきで答

をさがそうとしている〕

C ①でもね、もう答は返してもらったってあるんだから、やっぱりそれは当たったからちゃんと返してもらったんだから、正直、正直じゃないっていうのは、もうその答に出ているんだから、関係ない。

T では消します。

C えっ、だって。

〔ここで①のように論理的に考えを進めるための要素を整理し始めた子と、まだ、感情思考に頼っている子との差が見られる。〕

Tu 今あれを消したね。そうしたらこの辺で「だって、ブツブツ：」って言っているのね。そういうのはだめ。

あれ消されたら私は考えが進まないからそれ残して下さいって言うなら先生は残してくれる。気分だけで考えていちゃ今日の勉強はできないから、おれはなんか知らんけどそういう気がするんだっていうんじゃないか。

よ。だからちゃんとした理由を言ったでしょ。①さん、きちんとしたことを言ったですね。その意見とは違う、

ぼくの意見はちゃんとした意見である。①さんの意見に對抗できるというのを発見して、先生に決めてもらいなさい。ブツブツっていうのは気分が残っている。それを捨てなければ今日の問題は先に進まない。頭を

きれいに明るくして進めていかなきゃだめよ。難しいんだからね。さあがんばろう。

C Na3 のだからっていうところから最後まで。

T とにかく正直っていうのが入っている人のせりふは全部切る。

T 他にこれは削った方がいいっていうところ。

C うらをかく。

T どうして？

C うらばっかりかいていてもきりもないし、別に考えを進めるためには、うらをかくとかかかないとか必要なかったの？

C はい。

T では、うらをかくとか、かかないというのが、自分の考えを進める上でぜひとも必要だっていう人いますか。

C ①さんの考えだと必要なんじゃない。

C ①でも納得しちゃったんだもん。最初は必要だと思っていたんだけど、でも、みんなと話し合っているうちにそういう理屈はあって、それでおれ納得して、うらをかくのは必要なくなっちゃった。ワニが子どもを返したんだから、返す気があったから返すって言ったからうらをかくのは関係ない。

〔うらをかくとかかかないとかいう意見の発端は、母親が返すと答えても、必ずしも子どもが返るとはかぎらないのではないかとという疑問にあると思う。が、ここで、子どもが返ったという結果を押えたことで、この疑問は片づけられてしまった。〕

T 考えを進めるためには、他に残した方がいいっていうものがありますか。

C Na1 の理屈っていうのはあった方がいい。どんどん考えていくのに自分の理屈を通していくとだんだん答に近づいてくる。

T 気持ちとか気分で考えるんじゃない、ものごとの筋道で自分の考えを進めていくっていうので必要なのね。頭の使い方っていうことで、それぞれ頭に入れておいて下さい。これだけでいいかな？

C 母が泣くというのは必要ない。

C これは残した方がいい。

C これは必要ない。母が泣いても返すと思っていれば返さないし、返そうと思っていれば返す。

C ①残した方がいい。でもあんまり母が泣くのでって書いてあるから、だから、ワニがそう言ったって言うんだから、だから。

Tu 〔「だから」「だから」と声をはり上げた  
今大変おもしろかった。一生懸命くり返すから、「だ

から、だから」これ、いくら言っても同じ、小さい声で言っても大きい声で言っても同じ。大きい声で言ってもしょうがないの。静かに考えて、だからの意味をもっとはつきり考えて。

C あんまり母が泣くのでワニが言ったっていうから。母が泣くから、ワニがチャンスを与えたっていうの？そう。

C ぼくは残さない方がいいと思う。(B)くんの意見だと、前のは「あんまり泣くので母がこう言った」なんだけど、今日の「腹がいっぱいだったんで、一つ母親と知恵比べしよう」と思って、母親にこう言ったんだから、母親が泣くのでっていうのはいいじゃない。

Tu 母親が泣くからかわいそうと言って答が出ますか。今答をどうして出さなかったのを考えているんだろ。

T 母親がうんと泣いたからって、それは答と関係ないんだね。(B)君はいいことを言ったんだよ。母親が泣いたから、一つの問題を出したと、いうことがあったから残しておきたいと言ったけど、それは問題を出すことに役立ったかもしれないけど、今度は、答を出すためには、それから先、母親がいくら泣いたって、だめよね。もう母親は一生懸命考えて、どうしたら返してもらえるかって、答を考えることに一生懸命だね。そんな時に、まだわあわあ泣いていたら、おそろしい答は出なかっただろうよ。だとすると泣くということはいらない。

T 消すものと残すものがはっきり出たので先に進めましょう。さあ、いよいよ答を考えましょう。この先の考えを進めていきましょう。

Tu C これ見たら全然わかんなくなっちゃったもん。応援するよ。みんなが考えようとするのは非常に簡単だということを、今先生が書いてくれた。非常に簡単なんだよ。みんなが言ってくれたの。どっちかなんだから。形の上からだけ応援しますよ。「返す」「返

C さない」母親の言う言葉はどっちかなんだろ。あっ、そうか。

Tu そうだろう。「あなたは返す」「あなたは返さない」

C そうすると：ワニは返したんでしょ。形の上から考えたら、母親はどっちかを言ったら返してもらったんだろ。どっちを言えば返してもらえるのか考えてみよう。返すに賛成。思っていることのどっちかだから、ワニが返すと思っていれば返す、返さないと思っていながら当たって返さないんじゃない。

T Wニは返したんだよ。当てても返さないという考えは切り捨てなければだめでしょ。

C 母親が返すって答えて、ワニが返すと思っていたから子どもが返ったんじゃないの。

T (母親が返すと答えて、子どもを返してもらったという場合しか考えていない子が多い。)

T 知恵があつたから返したんだね。母親がいい知恵を出したから返したんでしょ。その知恵を考えなきゃね。返すの方だと思う。返してやるって言ったから返すんじゃないかな。

C 返さないの方だと思う。理由は、ワニは母親と知恵比べをしようと思っていんだから、どうせ当たらないと思っていながら当たらないから返さないという約束だから。

C (まだ論理的思考に入らず、思いつきに留まっている) さっき手伝ってあげたでしょ。形の上で考えると、お母さんは「ワニさんあなたは返すつもりだ」「ワニさんあなたは返さないつもりだ」このどっちかしか言えないのよ。どっちかを言ったら、子どもは返ってくるか、返ってこないか、どっちかになるんだよね。ところがもう答は出ている。返してもらったのよ。そうすると、どっちを言った時に返るか、そう考えればおしまいじゃないか。どっちを言ったら返るか、こっちを言ったら返るか、こっちを言ったら返らないか、それ

だけ考えていけばいいんじゃないの。君がいろんなこと考えすぎているんじゃないかな。形の上から考えたら、お母さんが、ぼつと言うと返ってきた。そうするとその答は、たまたま正しかった。なぜ正しいんだろうかっていうことだ。返すって言った時にはどうなるか、返さないって言った時にはどうなるか、一つ一ついいいに、ノートに鉛筆持って書いて勉強だ。

T お母さんが、返すと言って返してもらったか、返すと言って返してもらわなかったか、返さないと言って返してもらったか、返さないと言って返してもらわなかったか、このうちのどれか一つなんだろ。だったら、返してもらったんだから。

T お母さんは返すと言ったから返してもらったという人は？

Tu (三十七名挙手)

Tu お母さんは返さないと言った。そうすると返してもらったという人？

Tu (三名挙手)

Tu 三十七対三だね。もらえないは考えなくていいね。考えなくちゃいけないかったのは、この線かこの線(返すと答えて返してもらった、と、返さないと答えて返してもらったのどちらか)だったんだな。これからが楽しみだね。三十七名の人が正しいか、三名の人が正しいかということになるね。

T 返すと言って返してもらったという人はなぜこちらを選んだか。

Tu それを考える時にね、そちらは、自分はこの方がいいという風に考えたんだろ、簡単だろ。これが正しいということを主張するためには、たった二つしかないんだから、これは誤っているというのをせよばいいんだね。こちらに主張している人は、こちらの誤りを主張すればいいんだね。三十七人の人は、こちらではだめだ、三人の人はこちらはだめだ、と言いなさい。頭はこう

やって使うんだよ。

C やっぱり、ワニが思っていることを当てろって言うって

るんだから返さないと思っていたら返さないんじゃないの。ワニは思っていることを言えっていうんでしょ。

T (自分の主張を肯定する立場から一歩も出られない)

返さないって言ったらもう返してもらえないの？

C そう。

C 人食いワニっていうのは、つかまえるってことめったにないし、そのワニは腹がいっぱいで返す気だったんだから、返すって言って。

Tu (自分の組み立てとは違うもう一つの論理を考えようとしていない)

それで考えていたら切りがないから、答は二こしかないんだから、こっちが誤りだっていうことを言いなさい。

C 返すって思うなら、最初からつかまえない方がいい。

C やっぱりワニは返すと思っているんだから、返さない

と言ったら余計に怒って、自分のプライドを傷つけられるから。

Tu みんな余計なことばかり考えている。おじさんが一生懸命整理してあげたのに、これだけ考えればいいんだ

よって言っているのに、やれプライドが高いの、どうのこうの、そんなこと関係ないのよ。今までのみんな

の考え方は授業と同じ考え方をしていると思うの。私は正しいんだ、私の言っていることは正しいんだ。そ

ういう生活をずっと続けて来たのよ。だけでも、もうこれから六年生なんですよ。自分は正しい正しいって

言ったら人は認めてくれないの。正しくない人を見て、あれは正しくない、だから私の方は正しいんだと

言えば、人はわかってくれるの。今はたった二つのことを考えればいいんだよ。君達は、どちらが正しいんだときかれたら、こちらが正しいんだと言った方

が、力を入れて一生懸命これが正しいんだって言わな

くても、人はそうだねって言うてくれる。だから、今

三十七人の人は上をとったけども、そういうとり方はだめなのよ。上をとったんだったら、下はだめという

ことがわかってこなくちゃいけないの。下をとった人は上がだめだから下へこなくちゃいけないの。それを

C 言いなさい。まだなんにも言わないよ。

C 返さないって言ったら、ワニが本気になって返してくれない。

Tu 三人の方から言ってもらいましょう。

C ⑩返すと答えるとワニは、本当は返さないと思ってい

T 一貫の終り。

Tu いいこと言ってくれたよ。⑩さんは、こちらはだめだと、なぜかという、返すと母親が言うと思いますよ。

C そうすると、ワニが、いいえ、私は返さないと思ってい

C うそつくの？

C うそつくの？

Tu うそつくの？ いいえ、返さないと思っていましてって

C 返ってこない。

Tu 返ってこないね。これで一つ片づいた。

C ⑪返さないって答えれば、ワニが本当は返そうと思っ

Tu いたと言って返さなかったら。

C ⑩おおかさんが返さないって答えて、それであっていたら子どもを返してもらえる。

Tu ていねいに。一つ一つを。一番上は、返すって言う。そうするとワニは返さないと言う。そうしたらそれは

おしまい。その次、返さないと言ったら、ワニは返すと言った。その場合は返すと言うんだから返ってくる

んだらう。返さないと言ったら、そうだよ私は返さないよって言ったら、と、そこところがはっきりして

C あっそうか。

C あっそうか。

Tu 返さないと言ったらその子どもは返るんですか返らないですか？

C 返る。

C あっわかった。

Tu どっち？

C 返す。

Tu 子どもは返ってくるんだね。なぜ？

C わかった。はい。

Tu じゃ、この辺で授業はおしまいにしましょう。

C えっ。

Tu もったいない。まだ今考え方がやっとわかったところ

C だもの、このままにして家へ帰って一生懸命考えてく

Tu 先生、おれ訂正する。

C みんなわかるんですよ。たった二つのどっちかなんだ

Tu から。これじゃない、これじゃないってやっていけば

C 最後に残っていくんだから、みんなが考えられる、絶

Tu 対みんなが正解が出せるはずだから、今日帰ってよく勉強するんですよ。この次自分でちゃんと説明ができるように考えてくるんだよ。

C これで国語の勉強を終ります。

Tu (始めての経験とはいえ、感情やイメージを切り捨てて論理的に考えを進めることにこんなに苦しむとは予想外だった。しかし、今回の授業で子ども達は論理的な考え方を習得したようである。六年生になってから

C も、問題にぶつかる、感情で物を言ってもだめだよ)「ほらナイルワニの時みたいに考えなきゃ」など

T とつぶやくが多かった。)

Tu T 下鳥(東京・南四小教諭)  
上原教授